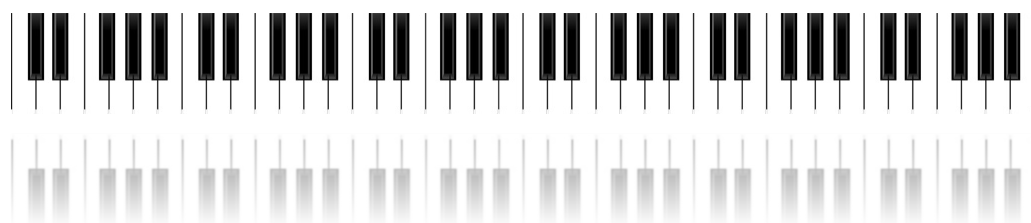


クラーク室内管弦楽団

第43回演奏会

若きピアノの調べ



2017年12月27日(水)19:00 開演

北海道大学クラーク会館 講堂

入場無料



プログラム

W. A. モーツァルト (1756-1791)

ピアノ協奏曲第9番変ホ長調 K.271 『ジュノム』

R. シューマン (1810-1856)

交響曲第2番 八長調 Op. 61

ピアノ独奏：岩本七音(市立羊丘中学校)

指揮：奥 聡 (メディア・コミュニケーション研究院)



お問い合わせ：011-706-2493 (大学院農学研究院 曾根輝雄)

プログラムノート

現在「クラシック音楽」と広く日本で呼ばれているジャンルもその実態は実に幅広く、バッハやビバルディのバロック時代のものから、たとえば、20 世紀のショスタコービッチ（さらにはもっと最近のもの）まで多様です。一方で、現在古典と言われている作品もそれが作曲された時は、当然ながら新曲であり現代音楽であったわけです。モーツァルトの時代はちょうどピアノという楽器が日進月歩で発展していく時代で、これまでのチェンバロなどの鍵盤楽器と異なる表現力の豊かさにモーツァルトも魅了され、27 曲ものピアノとオーケストラのための協奏曲を書いています。新しい楽器が一般に浸透していくためには、その楽器の特性を生かした新しい曲が生まれてくるということも必要で、まさにピアノという楽器とモーツァルトはともに手を携えながら成長していったとも言えるでしょう。モーツァルト最晩年の新しい楽器クラリネットに関しても同じことが言えるかもしれません。こうした新しい楽器の可能性を最大限に生かした新しい楽曲は、当時の人たちの耳にはやはり新鮮な現代音楽であったと思われます。依頼演奏会や貴族の宴会など、多くの場合 1 度か 2 度の機会のために作曲されていた曲が多かった時代において、モーツァルトの曲はいわば「品質過剰」であったといえそうです。そして、評判の良いものは実際に何度も再演されるということが起こり始めていた時代でもありました。

本日演奏する**ピアノ協奏曲第 9 番変ホ長調 (K.271)** は、ウィーンへ出る前の 21 歳のモーツァルトが、ザルツブルグを訪れたフランスの女流ピアニスト Victorie Jenamy のために、1777 年に作曲したと考えられています。「ジュノム」とは彼女の名前なのですが、なぜか長いあいだ Jeunehomme と誤った綴りで広まっていました。これは完全な誤解なのですが、一方で、フランス語で Jeunehomme は「若者」という意味であり、偶然ながらこの協奏曲の気分にあったニックネームであったとも考えられます。これが長いあいだ誤った綴りが広まっていた理由かもしれません。そして、本日のソリストはまさに Jeunehomme、中学校 1 年生の若いピアニスト岩本七音くんです。おじさんお婆さんのオーケストラも岩本くんの若々しい演奏に引っ張られて、「ジュノム」なコンチェルトが出来るのではないかと期待しています。

モーツァルトのピアノ協奏曲第 9 番からおよそ 70 年後の 1846 年に、シューマンは**交響曲第 2 番ハ長調**を作曲しました。メンデルスゾーンに招かれてライプツィヒに赴き音楽院で教えていたシューマンですが、心の病を抱え、教師の仕事が続けることはできませんでした。1845 年にドレスデンに移ってワーグナーなどとも交流を深め、バッハの研究などもしていましたがやはり精神状態は不安定なまま。そのような中で作曲されたこの交響曲。甘美な旋律や力強いリズム、魅力的なメロディなどがさまざまに散りばめられていますが、一方でどこか、まとまりに欠ける一種の「危うさ」が感じられる部分もあります。第一楽章はゆったりとした *Sostenuto assai* の序奏の後、3 分の 4 拍子の *Allegro ma non troppo* が華やかな音楽で展開されます。随所に *sf* (スフォルテ)「突然の強音」が出てきて、優美な音楽の流れに何か杭を打ち込むかのような不思議な響きを作り出します。第二楽章の *Scherzo* は *Allegro Vivace* のテンポで第一バイオリンはとても忙しいパッセージを弾きます。途中二種類の *Trio* を挟み、最後の *Coda* へと勢いよく突き進んで行きます。第三楽章 *Adagio Espressivo* はシューマンのロマンチックなメロディの真骨頂です。*Allegro molto vivace*、2 分の 2 拍子の第四楽章は、明るいハ長調の音楽です。ここではシューマンの暗い影はなく、未来に向かっての希望に満ち溢れた音楽になっています。新しい年に向けて一年の締めくくりにふさわしい音楽です。

今年もいろいろなことがありましたが、雪に覆われた北大のキャンパスでの演奏会。ごゆっくりとお楽しみいただければ幸いです。(メディア・コミュニケーション研究院 奥 聡)